方向

第一四二号　一九九二年三月一日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

歌人・大塚五朗（三三）

1991 2 1　原田憲雄

大和

一九四三年（つづき）　五朗、四十六歳。

『水甕』昭和十八年八月号。

唐招提寺

唐寺（からでら）の昼の静みに音たてて一筋白き竹やぶの風　（題九　唐招提寺六首）

大寺の屋根が涼しく截る空のすでに五月の夏となりゐつ　（〃）

水浅くあやめ咲かせし濠川のうらさむざむと夏は来向ふ

夏いまだ冷たき水が咲かせたるあやめの花の紫ぞ濃き　（〃）

僧一人物かきこもる寺にして春は落葉の青き樟の木　（〃）

秋篠の川の水かさやや漲（は）りて浅き夏なる葦の芽ののび　（〃　秋篠川初夏二首）

『水甕』九月号。

思惟

夏もやや翳りて涼（さむ）き寺濠のあやめ咲かせてはや静かなる（庭一〇〇 唐招提寺六首）

葦のびて水面狭ばまりしここにして夏めける雲の影がうつれる（〃一〇一 秋篠川初夏二首）

淋しすぎて写真にならぬを人と来て橋の上より見つつ嘆かふ

ひそかにも阿修羅が寄せし眉ねより涼しき夏の影顕ちにけり

離れゆく人を追はざるかなしみを或る夜の雨に沁みて思へり（庭一〇八）

静かなる日暮れの風の吹く聴けば君さへ遠き一人となりぬ（〃一〇九・水甕なし）

『水甕』十月号。

鑒真和上像

深々と雨の青葉の翳もちて御像の胸はやせてさびしき（庭一〇一 鑒真和上像三首）

菩提樹のかすけき花がゆるる時閉ぢし御目の終（つひ）にかなしき（〃一〇二 〃）

うれ（愁）ひ深く包（つつ）みて膝に置かす手の白さ（き）はいねて一人思へり（〃）

麦熟れて夕べはにほふひそけさを生駒山（いこま）に寄りて低き雨雲

谷深く午後は日ざしの及び来て紫冷ゆる藤の垂り花

八月九日、一艸舎同行の岡本和気子が奈良県十津川で遭難死去した。十一日、五朗と同行数人が大和八木町の岡本家に遺体を迎え、二十一日葬儀。九月五日、唐招提寺で追悼歌会を開いた。

九月九日、原田憲雄の父が死去。この月下旬、長男の大塚朗が京都大学を繰り上げ卒業、二十三日、海軍技術

科第三十三期生として入隊、訓練のため青島に向かう。

たぶん十月、『艸』第十七輯を発行する。A5。表紙は木版で「艸　第十七輯　故岡本和気子追悼号」は五朗の手、花を嘴にくわえた鳥の絵は森田曠平の筆である。目次と本文で五六頁、河原町荒神口上ル恒星社による謄写版刷り。奥付はない。目次は次の通り。数字は頁数。

岡本和気子略歴　一　遺詠抄　四　追悼歌　八　追悼記（三輪の山かげ　大塚五朗　一三　昏迷言　原田憲雄　一八　秋情　赤谷明海　二三　奈良をとめ　森田曠平　二七　岡本和気さん追憶記　杉田荘作　三一　岡本和気さん　宮崎篤三郎　四〇　故人を思ひて　平野謙三　四三　思慕　北浦良子　四八　後記　五五

『水甕』十一月号

〈題不明〉

大和なる畝傍の小野に君焼くと夜空に白くなびく煙か　（庭二〇　岡本和気さん死去六首）

思出〈思ひ出〉の中に生かせてはかなさ〈はかなし〉やあやめの花を君と見たりし　（〃・艸）

二上（ふたかみ）の山の上にして寄る雲を寂しと指してわれに告げしか　（〃・〃）

酒のむを戒められし寂しさが記憶にありて寒きこのごろ　（〃・水甕なし）

或る宵の抒情に蘇（い）きて細々と君の眉根は青かりしかな　（〃・〃）

日のくもり漸く暑し掃きためし萩の花殻〈はながら〉にむるる蜜蜂　（〃）

父も母も生命（いのち）短く終へ給ひきわが期（ご）のきは〈際〉を思ひみる日々（〃）

『水甕』十二月号。

秋　意

短かければ生命に沁むと妻はいふ子のいひ慣ける言のよろしさ

自ら日を経て心や安らげる子の着物など妻かたづけぬ

時にして眼すめるは子を遠く海彼におきて思ふなるべし

これは長男の朗が海軍に入隊する前後をうたったのであろう。九月二十四日付、原田宛の先生の手紙にいう。

昨夜十時　とうとう朗が家を離れて　実社会への第一歩を踏み出しました　子を巣立たせる——感慨亦無量なるものがあります。親と子がしみじみ話をするといふこともなくて過ぎた二十三年、家を離れるに際してもやはり別段これといふ話をすることもなく出て行きました。今朝　彼の机の上を見たら　紙片に「お丈夫で御暮らし下さい」と書いてあつただけ。それがいぢらしいといつて妻は朝から泣いてゐます。・・・

『水甕』昭和十九年一月号。

病　褥　旦　暮

結核の宣告うけてねむりしがその夜空はれ月明（あか）かりき　（庭二三　病褥吟・水甕なし）

血を吐きてわが死ぬ際を或る時は映画の如く思ひみたりき

井戸の水換ふると勢ふ人のこゑ朝より聞きて病む身疲れぬ　（庭二三　病褥吟）

この部屋にひと日の果の日がさして静けきかなや塵ひぢの舞ふ　（〃　〃）

機嫌よく遊ぶわが子のこゑききて浅夜を寒く寝につかんとす　（〃　〃・水甕なし）

「結核の宣告」について、昭和十八年十月十四日消印、原田宛先生の葉書にいう。

心配かけてすまない。多少自分でも気にかからないわけではなかつたけれど、京大の検診でさういはれてみると一時はあたりがまつくらになつた。今では心も落ちついて元気です、熱もなければ食欲もある。しかし医師は早く入院加療しなければ将来に問題を持ち越すといつて入院をすすめます、ところが小生の家庭事情はさう簡単にそれを許さない。今いささか迷つてゐるところです。・・・

このの ち一艸舎の運営は森田曠平・赤谷明海らにゆだねられ、在洛の森田が歌会を開き『艸』を編集回覧するため努力を傾けるが、はげしい戦争中であるうえ、森田は一家の生活維持のために特定郵便局開局にむけて力をさかねばならず、赤谷は奈良の律宗唐招提寺の経営にあたるがいつ召集があるかわからず、『艸』は執筆者もだんだんへって、出なくなってゆくようである。

『水甕』昭和十九年二月号。

病　褥　抄

寝に就くと敷布の皺をのばしつつひと日の長さ思ひ嘆かふ　（庭二三）

己が子と育てしは昨日までにして捧げしものの凛々しさよこは

大空を渡り終へたるしばらくを明る日があり寂しともなく

一九四四年　五朗、四十七歳。松子、四十六歳。朗、二十四歳。喜子、二十歳。樹、十六歳。哲、十三歳。迪子

十歳。洋子、三歳。朗は、三月に海軍技術中尉に任官、第三海軍燃料廠（徳山市）に勤務、八月、第一海軍燃料廠（大船）に転属、敗戦にいたる。

『水甕』昭和十九年三月号。

旦　暮　抄

山一つ暮れ残りたる厳しさをはやみ冬づく寂しさとせむ

今朝の雪保（も）ちて静まる低山にさす日ありしが早夕づきぬ

遂にして今年の雪の到れるを豊かにおきて比叡しづまりぬ　（庭七三）

かすかなる一生（ひとよ）なりしと思ふにも夕べ茜の雲はしづけき（〃一二三）

死を前にみな犢鼻褌（たふさぎ）を換へしとふかなしき余裕をわれ疑はず

『水甕』五月号。

続　病　褥　唱

街空の晴れて青きをかなしめば生命に触るる言もいひ出づ

あるかなきかの水淀ませて秋篠の川面はにほふ枯葦のいろ　（庭一〇一　秋篠川冬二首）

冬の日の曇りは低き風ありて枯れたる葦の黄に燃ゆるころ　（〃　〃　）

花すぎて閑（しづ）む八つ手の葉の明り昼ふる雪の降りて消えつつ（〃七五）

『水甕』七月号。

余　情

夕方の晴れは身に沁む直土（ひたつち）に音たてて遊ぶ幼子〈幼児（をさなご）〉の群〈むれ〉　（庭七三）

はねだてる比叡が晴れし夕べにて床の花瓶の花をかへしむ　（庭七四）

日の色のややに冷えゆく雲一つ夕べの比叡に寄りて久しき　（〃　）

季（とき）いまだ物にこもれる翳ありて冬菜畑にこゑ鳴く鵯　（〃　）

一人二人と帰るべき子の帰〈かへり〉来てひと日の果ての影をおく部屋　（〃一一三）

『水甕』八・九合併号。

鴨の浮く池

笹原と荒れたる土に石一つ据えられて白しそれだけの庭　（庭一〇〇）

風さきと波さへ青き池水に片寄る見れば鴨なきにけり　（〃一〇二　垂仁陵御濠五首）

片かげにはぐれし鴨の一羽二羽鳴けばさぶしも池水の照り〈光（てり）〉　（〃　〃　）

水鳥の水に泛かべる寂しさや日が照ればひのてる方に片寄る　（〃一〇三　〃　）

鴨じもの冬は寂しき水にゐて一羽が鳴けばまた一羽なく　（〃　〃　）

さりげなく風をかばへる位置に来て鴨みるわれに娘（こ）は寄り添ひぬ　（〃　〃・水甕はなし）

以上で原田の手許に保存された『水甕』掲載の大塚五朗短歌作品の切り抜きは終りである。以後の先生の周辺と、『日蝕の庭』などに収めてここには未掲載の短歌作品を、次回に紹介する。

甘蔗薗 —法華経巡礼 71—

1992 2 3 原田憲雄

05-06. さて、世尊は、そのときこの意味をさらに明らかにしようとして、これらの偈を説いた——

法の王なるわたしは、有を破摧する者として、世界に現われ、
法を説く、衆生たちの願いを知って。（1）
智慧ふかく偉大な導師は、語るべきことを久しくまもって、
秘密にし保持したまま、語らない、衆生たちには。（2）
その知識はさとりにくくて、愚か者はふいに聞いても、
こころ鈍く、疑いおこし、みち踏みはずし、さまようだろう。（3）
わたしは説く、その境涯や、能力に応じ、
それぞれのものごとにより、見方を正しくしてやるのだ。（4）
たとえば、カーシャパよ、雲が下界から湧き上がり、
一切をつつみ、大地を覆うようなものだ。（5）
水気に満ち、電光の花環で飾られた雲が、
雷鳴をとどろかせながら、歓喜させるだろう、一切の生物を。（6）
太陽の光をさえぎり、あたり一面を涼しくし、

低くたれこめ、雨を降らせるだろう、ぐるっと四方に。（7）
一様に降る雨は、その量がすくなくはなく、
まわりにずっと注いで、この大地を満足させる。（8）
なんでも、この大地に生えたものは、薬草でも、
植物、潅木でも喬木でも、大樹でも巨木でも、（9）
さまざまの穀物でも、野菜でも、
山や洞穴や藪に生えるだろうが、（10）
それらの一切を満足させ、雲は植物、潅木や喬木や、
渇望する大地を満足させ、薬草のうえにも降り注ぐ。（11）
同一の味なのだ、雲から降ってここにある水は、
それを、能力や境涯に応じて、植物、潅木は吸収する。（12）
大樹も、巨木も、小さいのも、中くらいのも、願望により、
能力により、すべて、水を吸収し、吸収しては思いのままに生長する。（13）
幹・茎・皮を、また枝・小枝を、それから葉を、
花や実を、生長させる、雲から注ぐ雨にぬれ、大いなる植物、薬草たちは。（14）
能力により、境涯により、どのようであれ、どこであれ、どんな種子であれ、

それぞれに生長する、降り注いだ雨は同一の味であるのだ。（15）

atha khalu bhagavāṃs tasyāṃ velāyām imam evārthaṃ bhūyasyā mātrayā saṃdarśayamāna imā gathā abhāṣata //

dharma-rājā ahaṃ loka utpanno bhava-mardanaḥ /
dharmaṃ bhāṣāmi sattvānām adhimuktiṃ vijāniya //1//
dhīra-buddhī mahā-vīrā ciraṃ rakṣanti bhāṣitam /
rahasyaṃ cāpi dhārenti na ca bhāṣanti prāṇinām //2//
durbodhyaṃ cāpi taj jñānaṃ sahasā śrutva bāliśāḥ /
kaṅkṣāṃ kuryuḥ sudurmedhās tato bhraṣṭā bhrameyu te //3//
yatha-viṣayu bhāṣāmi yasya yādṛśakaṃ balam /
anyam-anyehi arthehi dṛṣṭiṃ kurvāmi ujjukām //4//
yathā 'pi kāśyapā megho loka-dhātūya unnataḥ /
sarvam onahatī cāpi chādayanto vasuṃdharām //5//
so ca vārisya sampūrṇo vidyun-mālī mahā 'mbudhaḥ /
nirnādayanta śabdhena harṣayet sarva-dehinaḥ //6//
sūrya-raśmī nivāritvā śitalaṃ kṛtva maṇḍalam /

hasta-prāpto 'vatiṣṭhanto vāri muñcet samantataḥ //7//

sa caiva sama muñceta āpa-skandham analpakam /

prākharantaḥ samantena tarpayen medinīm imām //8//

iha yā kāci (W:kāś-ci) medinyāṃ jātā oṣadhayo bhavet /

tṛṇa-gulma-vanaspatyo drumā vā 'tha mahā-drumāḥ //9//

sasyāni vividhāy eva yad vā 'pi haritaṃ bhavet /

parvate kandare caiva nikuñjeṣu ca yad bhavet //10//

sarvān saṃtarpayen meghas tṛṇa-gulma-vanaspatīn /

tṛṣitāṃ dharaṇīṃ tarpet pariṣiñcati cauṣadhīḥ //11//

tac ca eka-rasaṃ vāri megha-muktam iha sthitam /

yathā-balaṃ yathā-viṣayaṃ tṛṇa-gulmā pibanti tat //12//

drumāś ca ye ke-ci mahā-drumāś ca khudrāka madhyāś ca yathā-vaśāś (W:vayāś) ca /

yathā-balaṃ sarve (W:sarvi) pibanti vāri pibanti vardhanti yatheccha-kāmāḥ //13//

kāṇḍena nāḍena tvacā yathaiva śākhā-praśākhāya tathava patraiḥ /

vardhanti puṣpehi phalehi caiva meghābhivṛṣṭena mahauṣadhīyaḥ //14//

yathā-balaṃ tā viṣayaś ca yādṛśo yāsāṃ ca yad yādṛśakaṃ ca bījam /

svaka-svakaṃ tāḥ prasavaṃ dadanti vāriṃ ca taṃ eka-rasaṃ pramuktam //15//

「有」は、「有るもの」である。われわれはそのような「有」が有り、その在り方は常に変わらない、と考えている。しかし、たとえば「林」は木の集まったものに仮に名づけたにすぎず、一本になったらもはや「林」ではない。「長い」は短いに対する相対的な呼び名にすぎなず、さらに長いものに対すれば、短いということになる。常識的に有ると考えている「有」には実体はなく、さまざまの因縁が集合調和して仮に「有る」かのように見えているに過ぎない。「有」のそのような虚妄性を開明するのが「有を破摧する」ことで、世界の宗教家・思想家のうちでは釈尊がはじめてそれを開明した。だから「有を破摧する者として世に現われ」た、という。「衆生たちの願い」とは、衆生のさまざまの意向や欲望をさす。「語るべきことを久しくまもって」とは、語りたい重要なことであっても、聞き手である衆生が、それを理解しうるまでに成長せぬうちは、発表せず、慎重に時機をまつ、ということ。次の「秘密」も、おなじことの別の言い方で、惜しんで隠すのではない。

　釈尊は『法華経』以前にも、対する相手に応じてさまざまの説き方で教えは述べてきた。教え方に差異はあっても、衆生に対する慈悲に差別はない。今や、釈尊はおのれの肉体の死が近づいたので、秘密をひらき、『法華経』を説いて真実を語る。大きな雷声をともなって降り注ぐ雨雲は、その譬喩である。この雨雲の放散する水は同じ一つの味わいをもつが、衆生は機根に応じて、一味の法門から、それぞれにふさわしい養いを吸収し、それぞれにふさわしい成長を遂げるだろう。というのがこの品の趣旨であり、趣旨にふさわしい譬喩がこの偈で展開される。梵文もインドの人達には甘美な詩句なのであろうと察するが、妙本の見事さは無類である。「恵みの雲

は潤いを含み、電光は晃曜（てりかがや）き、雷声は遠く震い、衆をして悦豫（よろこ）ばしむ。……」と読みくだしてもうつくしいが、

恵雲含潤　電光晃曜　雷声遠震　令衆悦豫　日光掩蔽　地上清涼　靉靆垂布　如可承攬　……

とつづく生きいきした字面の描写効果にはおよぶまい。そうして、

百穀苗稼　甘蔗蒲萄　〈※蒲萄や後出の蒲桃は、葡萄と同じ〉

にいたると、かつて映画でみたインドの甘蔗畑や、中央アジアの葡萄園が、まざまざと目に浮かび、この身がそのしげみにあって近づく雨雲を仰ぎみる感じがする。

ところで、梵語では甘蔗はikṣuvāku、葡萄はmṛdvīkāだが、わたしの訳文に見られるように、「甘蔗葡萄」にあたるその文字は梵文にない。ケルン・南条本だけでなく現存梵本のすべてがそうであり、妙本より古い漢訳の正本にも相当する訳語がない。梵文の意味に即していえば、この句は普通名詞だけだから「百穀苗稼」で十分で、「甘蔗葡萄」は余分である。たぶんクマーラジーヴァは、この品では梵文半頌をおおむね漢文四字二句に訳しているので、例にしたがって「百穀苗稼」では不足する四字に「甘蔗葡萄」を選んでそえたのであろう。そのそえものはインドの主な農産物のひとつではあるが、クマーラジーヴァの故郷、中央アジアはクチャの風物をいろどるものでもあったろうから、かれの望郷の情がこの四字にあふれて、訳文に精彩あらせたのであろうか。しかしそれだけではなく、また、阿含経典の次のような話を、参考として示していると察せられる。

邪見は邪志・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定を起こす。譬えば苦き果の種を地中におき、随時に溉

漑せば、か（の種）は地味・水味・火味・風味を得て、一切ことごとく苦きがごとし。ゆえは如何。種の苦きをもっての故なり。……正見はよく正志……正定を起こす。譬えば甘蔗・稲麦・蒲桃の種を地におき、随時に灌漑せば、か(の種)は地味・水味・火味・風味を得てかの一切の味のことごとく甜美なるがごとし。ゆえは如何。種子の甜きをもっての故なり。（『雑阿含経』巻二八。大正・二・二〇四中）

『雑阿含経』の求那跋陀羅訳は『法華経』妙本より後に出たが、梵本は早く成立し、右の話は『増一阿含経』巻八（僧伽提婆訳。大正・二・五八三中）『南伝大蔵経』（巻二二下・一三四―五）などに見える有名な説話である。『南伝大蔵経』はともかく、北伝の阿含経典はクマーラジーヴァが暗唱していたものであるはず。そのかれは、『法華経』がただ小乗を破斥して満足する厳しいだけの大乗ではなく、小乗から出発し、小乗のすべてを包んで、小乗を乗り越える、おおらかにやさしい大乗であることを熟知していた。植物を譬喩にとっても、小乗の阿含では、種の邪正善悪をあげて対象の《差別》を問題の中心に据える。『法華経』は、種の大小は善悪邪正とかかわりなく、さまざまの対象のそれぞれの差異として、その多様性をみとめ、妙法の《平等一味》に主題を移し、釈尊の慈悲の広大を鼓吹する。

『法華経』の薬草喩品は、説話学的にも阿含を含んで阿含を乗り越える典型だが、梵本では、それが明らかに表現されていない。ところが梵本にはない「甘蔗葡萄」を、四顆の漢字にまとめ、添えるだけで、阿含の譬喩から法華の譬喩へのはるかな道筋が、はっきりと見通せるようになる。クマーラジーヴァの自在な翻訳は、時として近代の学者の非難の目標とさえなっているが、それによって、『法華経』の密義を豊かに敷衍したのである。

斜川に遊ぶ （中国の詩人と仏教 二〇）

1992 1 10 原田憲雄

陶渕明の「斜川に遊ぶ并びに序」は次のような作品です。

かのと丑の正月五日、天気は澄んで和やかに、風物はしっとりと美しい。二三の近所の人と、斜川に遊びにいった。長流に臨み、曽城山を眺めた。魴や鯉が夕づく波間に鱗を躍らせ、鴎が微風に乗って翻り飛ぶ。あの南の丘は昔から有名すぎる、もう讃嘆するまでもあるまい。だが曽城は傍に連なるものはなく、ただひとつ沼沢にぬきんでて、遥かな霊山を想わせ、そのよき名は愛すべきだ。楽しく向きあって、なおものたりず、ふと詩ができた。月日のかく過ぎゆくことを悲しみ、わが齢の留めがたさを悼み、おのおのその年齢と郷里を書きそえ、きょうの日付を記した。

開歳倏五日　　年あけてたちまち五日、
吾生行帰休　　わが生もやがていとまだ。
念之動中懐　　それをおもえば心ゆらぎ、
及晨為茲游　　今日この遊びをすることにした。
気和天惟澄　　大気はなごみ空は澄み、
班坐依遠流　　舟端に席わかち流れにまかす。
弱湍馳文魴　　せせらぎを縞魚はしり、

閑谷矯鳴鷗　谷間にたかく鳴くかもめ。
迥沢散游目　とおくの沢に目をあそばせ、
緬然睇曽丘　はるばる眺めるあの曽丘。
雖微九重秀　「九重ノ秀峰」とはいえないが、
顧瞻無匹儔　見わたせどならぶものなし。
提壺接賓侶　瓢簞さげて客をもてなし、
引満更献酬　なみなみついでさしつさされつ。
未知従今去　わからんさ、これからさきに、
当復如此不　もいちどこんなにやれるかどうか。
中觴縦遥情　杯ふくめばこころのびのび、
忘彼千載憂　「千載ノ憂イ」だって忘れられる。
且極今朝楽　とにかく今日を楽しむことだ、
明日非所求　明日のことなどあてにはできぬ。

「かのと丑」は隆安五年(四〇一)で、陶淵明三十七歳、すなわち廬山の諸道人が「石門に遊ぶ詩并びに序」を作った次の年に当ります。詩の序としてはかなり長い文章がつき、遊ぶ者も「石門に遊ぶ」のように三十数人といった多数ではないにしても、二三の隣人と一緒です。この隣人を、松本幸男氏は「周続之らではなかろうか」(陶

渕明の生涯と作品）と推定しています。それなら周続之は二十五歳です。同伴者があるだけでなく、廬山に近い山（渕明の詩では曽丘）を崑崙山の霊峰曽城（増城）にたぐえているのも共通しています。ところが「石門に遊ぶ」が高い峰に登るのに対し、「斜川に遊ぶ」の方は平らな川です。しかも慧遠や道人たちの讃嘆する廬山を、名もあげずに「あの南の丘は昔から有名過ぎる、讃嘆するまでもあるまい」といっているのです。これは「廬山記」「石門に遊ぶ」などの遊記をすでに読み、それを枕にしての発言らしく、「あすこのひとたちは大袈裟だねえ」と冷やかす気味も感ぜられます。「斜川に遊ぶ」と廬山諸記との間に認められる牽引と反発は、「桃花源の記」と廬山諸記との間にも感ぜられます。

陶渕明が慧遠と交渉があったとするのは伝説で、事実は不明です。ふたりは会ってはおらず、劉遺民や周続之の話によって間接的に知っていたに過ぎないのかもしれません。しかし渕明は、劉や周に示されて、慧遠の著作はかなり読み、その教学や思想に対しは批判的だったようです。慧遠のほうは渕明の作品をほとんど読まなかったでしょう。渕明を無視したとか軽視したとかいうのではありません。慧遠は中国での漢人仏教学者の代表でしたが、そのかれにも、大乗と小乗との違いがはっきりとはわかっていず、いろいろな疑問があり、その解決は自分の責任だという義務感がありました。だからインドや西域の僧が来ると招いて経典を翻訳してもらったり、講義を聞いたりしました。中央アジアからクマーラジーヴァが長安に来たと知ると、長安は当時、晋からいえば異国であったのに、さっそく弟子をやって教えを受けさせたり、手紙を出して質問したりしたのです。そのほか世俗権力の仏教界への侵害に対する抵抗運動もせねばならず、廬山の信徒の育成などにもいそがしかったからです。

陶渕明は、慧遠に批判的であるといっても、個人として悪意をもつ理由はなく、交渉のない相手をわざわざ批判するような人でもありませんが、「斜川に遊ぶ」を作った四〇一年は、白蓮社の生まれる直前で、慧遠に傾倒する劉や周は、会うたびに慧遠をたたえ、渕明にもかれを訪ねるように勧めていたに違いなく、慧遠がすぐれた人にしても、友人たちの熱狂にはうんざり、といった気味があったのでしょう。斜川に共に遊んだ隣人が周らだとすれば、周は渕明より十二歳も若いのですから、その日の詩と序を、かれらが渕明に示したであろう「廬山記」「石門に遊ぶ」など遊記のパロデイに仕立て、からかったとしても、不思議ではありません。「パロデイ」というと早速、この詩の調子はそんなふざけたものではない、といった反論が出そうですが、「閑情賦」のようなエロティックな作品にさえ清らかさを失わないこの詩人は、パロデイにおいても悪ふざけには陥らず、かれのポリフォニックな思考と感情を、簡素な言葉に響かせるのです。

周続之は、二十歳前後のころ、仏教の応報説につき思想界の大物ではるかに年長の戴逵と論争したことがあり、自慢の種です。論争はふたりの間ではすまず、慧遠が「三報論」を著わして決着をつけたのですが、その要点は、仏教経典に「人間の行為には三種類の果報がある。一は現報、二は生報、三は後報」といっている。現報は、善悪ともにこの身に始まった行為の果報を、この身に受けるもの。生報は、来世で受けるもの。後報は、二生、三生、百生、千生も経過した後になって受けるものだ。

という、漢人には想像しがたいような時間論でした。周は、川遊びでもこの話を持ち出し「思想には宇宙論的な規模がなければ駄目ですよ」なんて熱を吐いていたかもしれません。

「おい、周君。へえ、そんなものですかね、と瓢箪が首を傾けてるよ」
「あ、ほんと。傾いてますね。どうしてだろう」
「きみは、ある男が薬売りの爺いさんの瓢箪のなかへ入ったら、玉堂厳麗にして旨酒甘肴が満ち溢れていた、という話を知ってるかい」
「その男は後漢の費長房ですね」
「入ったら『ただ見る、仙宮世界の楼観と重門と閣道宮と侍者数十人とを』ということだったね」
「ええ」
「廬山道人さんとやらの『石門』を、ごたいそうに紹介くださったが、瓢箪のなかの楼観を縮めた程度で、侍者はいない、いない侍者を補うために二三十人もの坊さんがえっさえっさとお登りになったのかな」
「皮肉だなあ」
「瓢箪はね、平凡でまともなやつのことだが、中に酒が（酒がなければ水でもいい）満ちておれば、真っ直ぐ立つ。飲むにつれて、飲む人の目には、やくざな岩の塊さえ重門閣道と映り、瓢箪は楽しげに傾くのさ」
「まさか」
「嘘ではない。《傾壷》とはそういう状態の壷、つまり瓢箪さ。杯ふくめばこころのびのび。瓢箪は空になると、飲んだ人と一緒にごろり倒れる。…とにかく今日を楽しむことだ、明日のことなどあてにはできぬ」
「…」

「ははは。壮大な宇宙論もいいが、目の前の波を走る魚の美しさはどうかね」

「瓢箪の中」は、目に見えるひさごの内部ですが、酒を飲む間の陶酔を指すともいえ、斜川の詩の「中觴」に通じます。觴はさかずき。瓢箪の中の別世界は凹型の非日常空間の一典型です。非日常空間に、重門や閣道を設定したのは道教の仙人だが、陶渕明は桃花源を展開しました。桃花源は普通の農村とほとんど変わりません。違うのは、世俗の権力の侵入収奪がないから穏やかで豊かな点だけです。ただ、この「だけ」が、渕明の生きる中国にはもうなかった、かれの「中觴」陶酔、つまりは想像のうち、詩のなか、を除いては。渕明の非日常空間は道教の仙境のようにものものしくはなく、廬山の石門のようにいかめしくもなく、一見ふつうの農村です。しかし世俗の農村が成人とすれば、桃花源は母体のなかの胎児のように純真で無垢です。母親は成人で、純真でも無垢でもないが、みごもった胎児への思いは純真と無垢に近いでしょう。渕明は詩文にしばしば「真」の字を使います。その真はほとんど常に胎児のような純真と無垢とを指し、その「真」を、胎児をおもう母親のような熱い眼差しで歌うときにこぼれでた言葉が、「真を含む」「真を養う」「真に復（かえ）る」「真に任かす」なのです。含も養も母胎の作用であり、母親の思いはつねに胎児に復り、自分の意思に従うより胎児の都合に任せるでしょう。母胎は生命を発出する凹型空間ですが、終局した生命すなわち死を収蔵する凹型空間が墓穴です。中国人は墓からまた生命が芽生えてくると考えたので、墓は母胎とつながっているわけです。母胎の象徴的表現ともみるべき桃花源を描いた陶渕明が、またしばしば墓を歌うのは、凹型の非日常空間の両面をこれで代表させたのでしょうか。かれの詩は母胎に帰りたい男の子の無意識と、胎児をみつめる母親の無意識とが、しっかりないあ

さったところから流れ出ているように感じられます。一般に中国の詩は男性的な、誇張を嫌わずにいえば、女性を切り捨てても男性的であろうとする傾きがあるなかで、きわめて珍しいものといえましょう。慧遠も「真」字をよく使い、やはり純粋無垢を指しますが、その内容は法身とか涅槃とかいった仏教的な意味を担い、抽象性のつよいものです。かれの非日常空間が凸型であるように、その詩文も男性的です。

同じ時代の同じ地域に住んだ人でありながら、慧遠と陶淵明のふたりは、その生き方においても、詩文においても、ずいぶん隔たっていました。とはいっても、志をかたく守り、身を処して清らかなところは共通しました。陶淵明は、批判的であったとはいえ、その慧遠から多くを学んだのではないでしょうか。

節分の日

1992 2 5　原田　慶

節分には寒くなることが多い。今年も雪から雨になって、三日は一日中降り続いた。出かける用事があったのでそれを済ましてから、壬生寺へ行ってみた。

バスを降りて坊城通りに入ると傘の行列で、追い抜くこともできない。道に並んだ露店は、鯛焼き、たこ焼き、焼き餅など火を使う所が多いから、盛んに焼いていれば、狭い通りは暖房しているようなものだろうけれど、みんな通り過ぎて行くばかりなので、店はたいてい火を止めてしまっているようだった。売れない鯛焼きは積み重なったままで、店のおじさんは腕組みして行列を眺めている。買って食べることもできないのだから仕方がない。こんな冷たい雨は人を急きたてて、誰もが愛想のない顔をしているけれど、さすがに炮烙

の売場だけは賑わっていた。素焼きの大きな皿に、厄年の人が年と名前を書いて奉納し、四月の念仏狂言の「炮烙割り」で割ってもらうと厄が落ちるのだという。そういうことに関係なく、一度あの炮烙というものに書いてみたいと思っていた。見ていると、家族の年齢と性別を並べて書けばよいらしいので、五百円払って一枚買った。数え年で書くのをうっかりしていたのでいろいろになったが、奉納所へ持っていった。「こころざし」と書いてあるから百円出したら、五十円のお釣りを渡された。どうしてだろうと思いながら、その五十円を入れて線香を一本もらった。大きな香炉の中で、たくさんの線香が燃えていた。みんな、煙を手ですくって自分の身にかけている。これはちょっと気おくれがして真似ができない。わたしの母は、若い頃にはそういうことはなかったのに、父が亡くなってから、四国八十八か所、西国三十三か所を巡り、線香の煙を身にふりかけ、御詠歌と般若心経を熱心に唱えた。どうしてあんなに変身したのかと思うが、人は何かに追い立てられるような時期があるものなのだろう。今では足が悪く遠出はできなくなったけれど、手術をしてもらって、一人暮しに不自由はないところまで回復した。いつ行ってもテレビの前でにこにこしているから、霊場の線香の煙には御利益があるらしい。

三日には午後に八回「節分」という狂言が公開される。四十分間のものなので、一時から始まって最終回は夜の八時になる。見物席へ行ってみると、一時の開演に十五分ほどあったが、満員で前が見えない。隣の建物の上から向かいの狂言堂を見るようにしてあって、席は階段状に下へ降りている。いちばん下が狂言の舞台と同じくらいの高さになる。そこは屋根がないのでみんな傘をさしているから、後ろの高い所に立っていても、前が見えなかった。

狂言が始まると、後ろでビデオカメラを据えていた人が、前の人に傘をよけてくれるように言ったらしくて、

その辺りだけ少し見やすくなった。前の人は雨に濡れただろうと思う。みんなが見ようとして、身体を右へ左へと動かすので、人の間からのぞいていると見えたり見えなかったりする。もっと後ろにいる人は「なんか黒いものが時々見えるわ」などと言っている。それでも帰るようでもない。毎年、公開されているから、来ている人はたいてい知っていて、カンデンデンという鉦や太鼓や笛の音で想像しているのだろう。わたしも見たことがある。何度でも面白いから、みんな伸びたりかがんだりしてのぞいている。

「あんた、ほんでもようこんなとこで出会えたもんやな、わたし朝からよっぽど電話しようかと思たんえ、そやけどあんたが、行くかどうかわからへんし、もう電話せんと来てしもたんやわ」

などと雑談する。仲よしの人が壬生寺へ来てから偶然に出会ったらしい。一人で来ている人もあるが、たいていは何人か連れだって来る。みんな仲間づくりの上手なのに、わたしはいつも感心する。

「あっちもこっちも行ってなあ、石清水やら稲荷やら……、お札やお守りばっかり、ぎょうさんたまって」

「そうか、そんなにあっちこっち行ったんか、お札やらはちゃんとしとかんとあかんえ、門口に貼っとくとか」

わたしは後ろで話を聞きながら、狂言を見るのに一生懸命になっている。すぐ前にいた人が、かばんを開けてごそごそしていると思ったら、フードのついたレインコートを出した。わたしの方へ振り返って「寒いですねえ」と言った。わたしは「そうですねえ」と言って、その人が着やすいようにコートをちょっとひっぱった。

カンデンデンの音が少し高くなったので、後ろの人がまた言う。

「もう豆撒きが始まるのとちがうか、あんた節分の豆こうたん？」

「買わへん、あんなん固いし誰も食べへんやん」

「そうやな、ほんまに」

狂言は、手拭いで顔や頭を包み、着物を着て人間になりすました鬼が、後家さんの家に上がり込み、打出の小槌を使って美しい着物などをたくさん出してやって、酒を飲んでいたが、酔いつぶされて寝てしまったために、正体を見破られる。起き上がってつかみかかる鬼に、後家さんは豆を打ちつけて追い払ってしまう。身ぐるみはがされ、打出の小槌をとりあげられた鬼はほうほうの態で逃げて行った。

後家さんの家に上りこんだ鬼は何を意味しているのだろう。もと、節分には厄年の人が、豆を紙に包み、それで身体をさすってから道の辻などに捨てて、厄を払ったのだそうである。十万上人が、壬生や嵯峨で念仏狂言を始められたのが弘安二年(一二七九)頃で、豆を打つことが記録に見えるのは室町のはじめ、応永三十二年(一四二五)頃だという。「節分」という狂言が、初めからあったとすれば、鬼に向かって豆を撒くということはしなかったはずである、この狂言は、後の時代に加わったものかも知れない。鬼は祖先の霊だというのが古くからの考え方だから、豆を打って追い払ってはいけないとも言う。

古い習慣だと思ってしていることが、もっと昔のことを考えると、意味が違っていたりする。狂言が終わったので手をたたいてから、振り返ったら、もう後ろには人がいなかった。先ほどから話をしていた人も、どんな人だったのかわからない。何でもないおしゃべりも、節分だから面白い。外へ出ると、境内には相変わらず人が多く、迷路のように並んだ店から、醤油の焦げるようなこうばしい匂いがたちこめていた。こういうときに、突然現われる祭りの場というものは、なんど踏み込んでみても、あるようでないような、幻のように不思議な感じのするものである。